

イングランド中央部における炭坑夫の初期友愛協会 ： イギリス産業革命期における坑夫友愛協会の研究 (3)

著者	村串 仁三郎
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	58
号	3・4
ページ	203-237
発行年	1991-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/7747

イングランド中央部における 炭坑夫の初期友愛協会

——イギリス産業革命期における坑夫友愛協会の研究(3)——

村 串 仁三郎

目 次

イギリス産業革命期における坑夫友愛協会の研究

- I. スコットランドにおける炭坑夫の初期友愛協会（本誌56巻第3号）
- II. イングランド北部における炭坑夫の初期友愛協会（本誌56巻第4号）
- III. イングランド中央部における炭坑夫の初期友愛協会（本誌本号）
 - 1. イングランド中央部における石炭業と炭坑夫の特質
 - 2. ランカシャーにおける炭坑夫友愛協会の実態
 - (1) ランカシャーにおける初期炭坑夫友愛協会の普及
 - (2) ランカシャーにおける炭坑夫友愛協会を基盤とする労働組合の形成
 - 3. ヨークシャーにおける炭坑夫友愛協会の実態
 - (1) ヨークシャーにおける炭坑夫友愛協会の普及
 - (2) 西ヨークシャーにおける友愛協会を基盤とする炭坑夫労働組合の形成
 - (3) 南ヨークシャーにおける友愛協会を基盤とする炭坑夫労働組合の形成

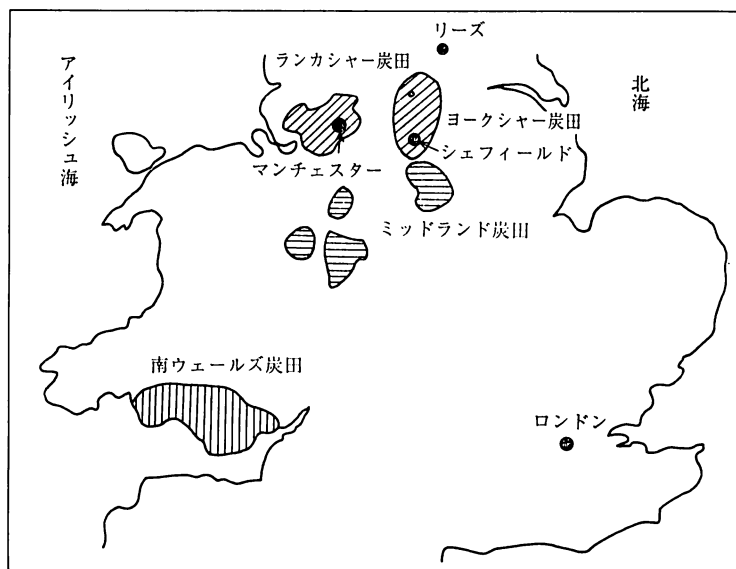
1. イングランド中央部における石炭業と炭坑夫の特質

私はこれまで産業革命期におけるスコットランド、イングランド北部の炭坑夫の友愛協会について検討してきた。ここでは、ランカシャーとヨークシャーの二つの炭坑地帯における炭坑夫の友愛協会について検討することにした。

イギリスの伝統的な地方区分法に従えば、ランカシャーとヨークシャーは、イングランド北部に属する。しかし、イギリスの石炭業史からみると、両地方は、先の1論文でみたイングランド北部とは根本的に異なった存在であり、従って私は、あえてこの2地方をイングランド北部としてでなくイングランド中央部ととらえておきたい。

イングランド中央部には、両地方のほか、ノッティンガム、ダービーシャーの両地方を含む東ミッドランド、それにスタッフォードシャーの西ミッドランドの大炭坑地帯が存在する。

とくに西ミッドランドの炭坑地帯は、歴史も古く、すでに1700年頃には年産51万トンの出炭をみたといわれており、その後の出炭もスコットランドの水準を若干上廻って推移してきた。しかし、イギリスの石炭業史をみる限り、産業革命期のミッドランドにおいては、炭坑夫の友愛協会が普及していたことが少しも窺い知ることができない。私の知る限りでも、一般



第1図 イングランド中央部の炭田

に当時のミッドランズの石炭業史の研究が少ないだけでなく、炭坑夫の友愛協会の研究が全く存在していない⁽¹⁾。

そうした傾向に対して、ランカシャーとヨークシャーの2地方には、スコットランドやイングランド北部におけるダッカムやキャンベルの著作のような当該地についての詳しい石炭業史についての研究はないが、炭坑夫の友愛協会が存在していたことを示す若干の研究が散在している。ここでは、それらの研究を手掛りにして、ランカシャーとヨークシャーの炭坑夫の友愛協会の実態を解明することにした。

ヨークシャーの石炭業⁽²⁾は、比較的早くから発達しており、1700年には年産30万トンの石炭を産出していた⁽³⁾。しかしイングランド北東部やスコットランドと比べるとその発達は著しく遅れていた。18世紀中葉の産業革命の開始期に入っても、ヨークシャーの石炭業はそれほど大きくはなかった。その理由は、ヨークシャーが内陸に位置していて、交通に不便であり、海岸沿いにあった他の炭坑地帯と比べて著しく不利であったことである。

それでも1770年代に入ると、リーズ、ブラッドフォード、ウェイクフィールドにおける伝統的産業の発達に加え、近代的な繊維産業の発生に伴う燃料用石炭、シェフィールドの金属工業や製鉄業の発達に伴う燃料用石炭の需要が拡大し、また運河の開設などによる水上運送路の改善によって、西ヨークシャー、南ヨークシャーの石炭業は、急速に発展しはじめた。因に、1750年には、年産50万トンであったヨークシャーの出炭高は、1775年には85万トン、1800年には110万トン、1815年には195万トン、1830年には280万トンとなったといわれている。

他方ランカシャーの石炭業⁽⁴⁾は、ヨークシャーとも比べて更に発達が遅れ、18世紀の中頃からやっと目立って発達してくる。その理由は、ランカシャーの石炭業は、マンチェスター、リバプールという産業革命によってのみ発達した都市を背景にしていたからである。因に1700年には年産8万トン、1750年には35万トン、1775年には90万トン、1800年には140万ト

ン、1815年には280万トン、1830年には400万トンといわれている。18世紀70年代からはランカシャーの石炭業が、ヨークシャーのそれを凌駕している。

みられる通り、ヨークシャー、ランカシャー両地方の石炭業は、18世紀70年代から急速に発達しはじめたのであって、スコットランドやイングランド北東部の石炭業のように永い伝統をもたず、炭坑における労資関係も比較的蓄積が薄かったといわなければならない。ともあれ、両地方の炭坑経営も、イングランド北部の場合と同様に、当初から大地主による経営が中心で、18世紀の第4四半期頃からとくに製鉄業者による経営が目立つようになってくる。

当時のこの両地方における炭坑夫の雇用関係の特質は、年季契約を伴うことも多かったが、個々人による自由な契約が行なわれており、ここではスコットランドやイングランド北東部におけるように、年1回の集団的な年季契約制度が存在していなかったということ⁽⁵⁾である。

何故この地方に年1回の集団的な年季契約が存在しなかったかという問題について、ここで立入る余裕はないが、すでに指摘したように、スコットランド、イングランド北東部にブラザーリングと呼ばれるギルド的な同職組合を存在させた最重要の根拠として、年1回の集団的な契約更改が考えられたが、逆に年1回の集団的な契約更改制度の存在しなかったこの地方に、私は、ついにブラザーリングと呼ばれる友愛協会の存在を発見することができなかった。

私見によれば、ランカシャー、ヨークシャーの両炭坑地帯は、石炭業の歴史も浅く、年1回の集団的な契約更改制度も存在しなかったため、18世紀末までに、スコットランドやイングランド北東部のようにブラザーリングと呼ばれる炭坑夫のきわめて積極的なギルド的な同職組合を創立し普及させることが出来なかったのではないかとことである。加えて、両地方とスコットランド、イングランド北東部との地理的隔絶及びそれぞれの地域的封鎖性は、いわば先進地から後発地へのブラザーリングの移転を困難に

し⁽⁶⁾た、ということでもあろう。

とはいえ、産業革命期の炭坑労働は、熟練労働であり、熟練労働は徒弟制度を基礎としていることと、もともと共同体性の強い炭坑に加えて炭坑夫の共済活動、親睦の必要なことなどは、炭坑夫の集団形成、なんらかの組織の形成を促したであろうことは疑いない。

確かに産業革命期においてランカシャー、ヨークシャーにはブラザーリングという炭坑夫の組織は存在しなかったが、いわゆる炭坑夫の友愛協会は存在していたのである。

以下にわれわれは、この二つの地域に炭坑夫の友愛協会がどのように存在していたか、そして、それが炭坑夫の初期労働組合の形成にどのように関わっていたかを分析することにした。

《注》

- (1) この期のミッドランドの石炭業については、以下の研究を参照。
A. R. Griffin, *Mining in the East Midlands 1550-1947*, 1971.
J. H. Williams, *The Derbyshire Miners*, 1960.
- (2) この期のヨークシャーの石炭業については、以下の研究を参照。
F. Machin, *The Yorkshire Miners, A History*, Vol. I, 1958.
J. Goodchild, *The Coal King of Yorkshire*, 1978.
S. Pollard and C. Holmes, ed., *Essays in the Economic and Social History of South Yorkshire*, 1976.
J. Benson and R. G. Neville, ed., *Studies in the Yorkshire Coal Industry*, 1976.
- (3) 出炭高については、本稿の第1論文75頁を参照されたい。
- (4) この期のランカシャーの石炭業については、以下の研究を参照。
R. Challinor, *The Lancashire and Cheshire Miners*, 1972.
D. Anderson, *Blundell's collieries 1776-1966*, 1986.
- (5) J. Goodchild, *The Coal king of Yorkshire* p. 46.
- (6) イギリスの石炭業においては、ローカリズムが強く少なくとも産業革命期には、炭坑夫の移動はあまりなかったようである。

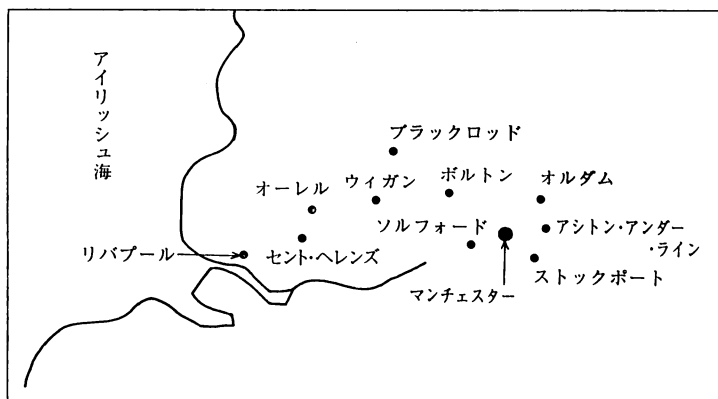
2. ランカシャーにおける炭坑夫友愛協会の実態

(1) ランカシャーにおける初期炭坑夫友愛協会の普及

ランカシャーの石炭業は、18世紀後半から発達を開始したので、石炭業の伝統が著しく弱く、炭坑夫の年季契約を年1回集団的に統一的行なうという慣行が成熟してなかった。そのため、われわれは、今のところランカシャー地方の石炭業に、スコットランドやイングランド北東部にみられた「ブラザーリング」というような明確なクラフト・ギルド的同職組合の存在を確認することができない。とはいえ、後にみるように、炭坑夫の友愛協会は、18世紀末から存在していたことが確認されており、19世紀の10年代にそれらが労働組合化しつつあることをも確証することができる。そして、18世紀末から19世紀初年代の炭坑夫の友愛協会も、多分に自立的傾向をもっており、ブラザーリング的な性格を持っていたことが考えられる。しかし今の研究段階では、それを裏付ける資料を全く欠いており、今後の研究に待たなければならない⁽¹⁾。

さて、ここでは、まず産業革命期のランカシャー地方の炭坑夫友愛協会の普及状況について明らかにしておきたい。D. アンダーソンは、Wigan と Orrel の炭坑経営者であった Blundell 家の資料によりながら、「1800年以前にウィガンには少なくとも炭坑夫の10の友愛協会が存在していた。そして団結禁止法の存在している間に新たに11の協会が形成された」⁽²⁾と指摘している。もっともアンダーソンは、これらの友愛協会をただちに「労働組合の隠蓑」であるとみなしているのであるが、その根拠を示しているわけではない。私は、当時の友愛協会を単純に「労働組合の隠蓑」とみなすことに反対する⁽³⁾。この点は、ここでは深く立入らないが、ともかくウィガン周辺の炭坑に当時炭坑夫の友愛協会が普及していたことは明らかである。

アンダーソンによれば、ウィガンとオーレルの中間にあった Pemberton



第2図 ランカシャー地方の炭坑町

の炭坑には、1794年10月から機能していた *Brotherly Union Society* という組織が存在し、1804年と1830年に規約改正を行ない、永い間存続していた。また「オールレルでは、1808年5月に *Union Society* が設立された」⁽⁴⁾ ということである。アンダーソンが明らかにした炭坑夫の友愛協会は、これだけのことであって、その友愛協会が、どのような活動をし、どのような性格をもっていたか、全く明らかではない。

他方、初期労働組合史の研究家の A. アスピナルは18世紀末のウィガン周辺の炭坑夫の争議資料を紹介し、そこに炭坑夫のなんらかの組織が存在したことを示唆している。ウィガンの代表的炭坑経営者のブランドルは、1792年10月1日の手紙で次のように述べている。

「広くウィガン周辺の炭坑管理者たちは、今夜炭坑夫たちが仕事を放棄し、騒擾的方法で約500人が集会し、管理者に法外な賃上げを要求している、とのニュースをもってきた。炭坑夫たちは、管理者たちに明日の3時までに回答を要求し、もし自分たちの要求が入れられなかった場合は、エンジンや捲揚機をひき倒し、坑内を水びたしにして、炭坑を破壊すると脅迫している。もしこの団結・combination が直ちに弾圧されないなら、その結果は、炭坑主だけでなく、この地方全体に深刻な事態を招くことに

なるだろう⁽⁶⁾」。

この争議は、25～40%の賃上げを要求したものであったが、軍隊の出動によって鎮圧された。10月8日の手紙でブランデルは、争議について次のように評した。「大変幸運にもエンジンへの危害はなかった。……多くの炭坑夫と運河の運搬夫たちは、遠くから我々の事態の進行を見に来ていた。そしてもし炭坑夫が勝利すれば、争議はこの地方を超えて遠くに広がったであろう」⁽⁶⁾。

ブランデルの手紙は、この炭坑夫の争議が、1炭坑のストライキではなく、ウイガン地域全体のものであり、500人⁽⁷⁾近くの炭坑夫 *colliers* が参加し、各炭坑を超えた統一的な賃上げ要求を行なう、きわめて組織的なものであったことを示している。ということは、この争議の背景に炭坑夫の組織の存在を感じさせるに十分である。因にブランデルの手紙でいう炭坑夫の「団結・combination」⁽⁷⁾ は、争議集団を指していると同時に、争議の背後に存在した炭坑夫の友愛協会を意味していたようにも読みとれる。

例えば、1794年に設立をみたといわれる Pemberton 炭坑の *Brotherly Union Society* なども1793年の友愛協会法の制定に伴って、法的に登録されたことを意味し、それ以前からすでに存在していたのかも知れない。

とはいえ、私は、今18世紀末の炭坑夫の友愛協会がどのような性格をもったものか、明らかにする資料をもたない。従って、R. キャリノアのように、なんの証拠もなしに1794年に設立されたといわれるペンバートン炭坑の *Brotherly Union Society* = 友愛協会が共済組合を隠簀にした「最初の坑夫組合」⁽⁸⁾ であるとみなすこともできない。私は、むしろ *Brotherly Union Society* は、1830年に規約改正をしていることからみて、共済組合型の友愛協会そのものであったとみたい。

事實は、18世紀末の共済組合型の友愛協会が、労働組合の隠簀として存在していたというのではなく、後にも見るように、共済組合型の友愛協会が、幾分ともブラザーリング的性格をもつようになり、あるいは一時的にストライキの促進手段となり、一時的に労働組合的な働きをしったりしたと

いうところにあるのではなかったろうか。これが私の推論である。

ランカシャー地方の他の炭坑地帯、Bolton, St. Helens, Oldam, マンチェスター市近辺の Ashton under lyne, Salford などの炭坑夫友愛協会についても、今のところ全く明らかではない。ただし後に詳しくみるように、1818年の後半から翌年にかけてランカシャー全域で炭坑夫の賃上げ闘争が展開され、労働組合がはっきり形成されてくる過程をみると、きわめて自立的な共済組合型の友愛協会・Benefit Society が広範に存在していたことが浮き彫りにされてくるということである。

1819年2月26日付の『リバプール・マーキュリー』紙は、セント・ヘレンズ地方の炭坑争議について詳しく報じつつ、友愛協会について興味深い指摘を行なっている。

すなわち、争議の終息段階にセント・ヘレンズの治安判事（実は炭坑のオーナー）が争議中の炭坑に対して示した政策の中で、「この近辺の平和的な炭坑夫たちは、共済目的の協会を組織している」⁽⁹⁾と述べ、そしてこの共済組合が、争議をしてる炭坑夫たちのために利用されていると次のように非難している。「これらの協会は、不当に扱われまたは自分の過失なしに解雇された人々を助けるという考えによって、不満分子の炭坑夫たちの強い要望に従って寄附を与えるように強いられている」⁽¹⁰⁾。そして協会がストライキ実行者に寄附や援助を与えるのを止めるべきであると強調し、脅迫している。

この事実は、セント・ヘレンズ地域には19世紀初めに、平和的な共済組合型の炭坑夫友愛協会が存在しており、それは、しかもストライキの炭坑夫たちに恐らく失業手当を支給したり、なんらかの口実で彼らを助力するような自立的存在であったことを示している。それはまた、スコットランドやイングランド北東部の経営者主導の共済組合ではなかったことを示しているのである。そのことを証明するものとしてセント・ヘレンズの代表的炭坑主の Hughes 家の炭坑経営帳簿をあげたい。J. Harris が分析しているように、そこには色々の慈善への寄附が計上されていたにもかかわらず

ず、特に自分の経営する炭坑の友愛協会への寄附といったものは見当たらないのである⁽¹⁾。彼の炭坑の友愛協会が経営者主導のものであれば、経営者側からの寄附が支出されたはずである。

というわけで、19世紀初め頃のセント・ヘレンズにおける友愛協会は、経営者主導ではないきわめて自立的な共済組合であったことが予想される。ただし問題はその頃こうした自立的な共済組合型友愛協会のほかに、ブラザーリングのような、あるいはブラザーリングに近い友愛協会が、非公然にしろ存在していたかどうかであるが、残念ながらその点を明らかにする資料は、今のところない。ただ後に指摘するように、1818年の夏に、はっきりと炭坑夫の労働組合が設立されることになることから察すれば、ブラザーリングに結集していたような炭坑夫層が形成されつつあったのではないかということである。

こうした傾向は、ランカンシャー地方の一般的傾向だったように思われる。この点は、更に19世紀10年代1818年の労働組合の形成の分析によって明らかになるであろう。

《注》

- (1) イギリスの歴史学界では、筆者のような問題関心がまだみられず、今後炭坑夫の友愛協会の研究が進めば、ブラザーリングのような組織の存在が、検出されるのではないかと、密かに期待している。
- (2) D. Anderson, *Blundell's Collieries; Wages, Disputes and conditions of Work. Transactions of Historical Society of Lancashire and Cheshire* No. 117, 1965, p. 115.
- (3) なお、同職の友愛協会が、団結禁止法下に「労働組合の隠襲」として利用されたという見解は、恐らくウェブによって初めて流布されたものであろう。例えばシドニー・ウェブ『労働組合の歴史』上巻、日本労働協会、93頁参照。しかし私は、ウェブも含め、イギリスの論者が、十分根拠を示すことなしに、友愛協会が労働組合の隠襲となっていると主張する傾向が強いと指摘しなければならない。そのような傾向が全く無いわけではなかっただろうが、むしろ明確に労働組合化を自覚できない友愛協会、とくにブラザーリング型の友愛協会も多かったのではないか、というのが私の印象である。少なくとも炭坑においては、そうだった。従って意識的に労働組合が共済組

合を隠簍としたのではなく、共済組合が、クラフト・ギルド的な同職組合であつたり、それ故に時として労働組合化の傾向を示したり、共済組合型の友愛協会もクラフト・ギルド的同職組合の傾向をもったり、それがまた労働組合的傾向を示すようになったりしたのが実像ではなかったかと思われる。

- (4) D. Anderson, op. cit., p. 115.
- (5) A. Aspinall, *The Early English Trade Unions*, 1949, p. 7.
- (6) Ibid., p. 9.
- (7) Ibid., p. 9.
- (8) R. Challinor, *The Lancashire and Cheshire Miners*, p. 22.
- (9) *Liverpool Mercury*, 26. Feb., 1819. or J. P. Harris, *The Hughes Papers, Transactions of the Historic Society of Lancashire and Cheshire*, Vol. 103, 1951, p. 123.
- (10) Ibid., p. 123.
- (11) Ibid., p. 127.

(2) ランカシャーにおける炭坑夫友愛協会を基盤とする労働組合の形成

ランカシャー地方においても、全国的な潮流に沿って、1818年8月に炭坑夫の労働組合が組織され、短期間ながら注目すべき活動を行なった。

内務省資料によると、1818年8月18日頃、マンチェスターで各種の繊維労働者、帽子製造工、鍛冶、レンガ積工、刃物工、靴工、機械製造工、炭坑夫・colliers など16職種からなる労働組合設立のための会議が開かれた。この会議には、マンチェスター、ストックポート、アシュトン・アンダー・ライン、オルダム、バーリーなどマンチェスターとその周辺の町から各種の職業を代表する労働者が集まり、全職業的労働組合・Union of all Trades の設立と活動の展開を決議した⁽¹⁾。

決議は10項目に及んだが、その要点は次の通りである。第1、組織名は「博愛協会・the Philanthropic Society と呼ばれる全業種の労働組合・Union of all Trades」とし毎月第2土曜日に、全業種から代表を出して会議を開くこと、第2、「この組合に加入するすべての業種の一般的福祉のために基金を設立することを各業種が推進し、とくに弾圧に抗し、あるいは災難を軽減し、地域の労働者が礼儀正しく容易に暮らせるように努

めること」, 第3, 「賃上げの必要を感じている業種は, 賃上げ目的のために招集した代表者会議にその旨報告し, 他の業種はこれを支援する」, 第4, 「もしある業種が雇用主の弾圧で, 雇用を失なうことになれば」, これを支援する, 第5, 「働く仲間が弾圧され, あるいは違法にあつかわれれば, わが協会は, 法的な救済をえるために彼らを支援する」, 第6, 「この協会を構成する各種の業種から, 投票・ballot で11人の委員会・Committee of eleven persons を選び」, 3ヶ月ごとに交替する。第7, 「この協会のあるいは代表委員会の礼節を維持するために, 誰れも政治的, 宗教的論争を行なうことは許されない」, 第8, 「それぞれの町には各業種の支部的協会・Auxiliary Society があり, それは副次的な規約をもつことができる」⁽²⁾, その他略。

この決議からわかるように, 広範な業種から成るこの友愛協会は, はっきりと賃上げを要求し, 雇用条件の改善を目的とした労働組合であった。そして, その性格は, 各業種別の組織を認め, それを統合した職種別労働組合連合のような印象を与える。しかし, 各種の労働者を一つの組織に統合しようとする一般労働組合⁽³⁾の様相をも呈しているようにも思われる。

しかし今この労働組合の性格の分析に係わっている余裕はない。ここで明らかにしておきたいことは, 11月には「破壊された」⁽⁴⁾といわれるこの労働組合の設立に, ランカンシャー地方の炭坑夫が参加し, それを契機に炭坑夫の労働組合が設立され, 短命ながら活動したという事実である。

ハモンドは, 紡績工が炭坑夫にこの新しい労働組合に加入するように依頼したという手紙を紹介している。その手紙は「マンチェスターの紡績工は, 私に彼らの労働組合に君たちが参加するように頼むように言ってきた。イングランドのすべての業種は, 職業と改革のために一つの組織に統一しつつある。君たちは, 問題を討議するための会議に代表を送るように期待されている」⁽⁵⁾と述べている。この手紙は, マンチェスターから10 km ほど離れた Stanley Bridge の1労働者からスタンレイ・ブリッジと

その周辺の「すべての炭坑夫」⁽⁶⁾ にあてられたものである。

この呼び掛けは全地的に行なわれたようである。この呼び掛けに応じ、炭坑夫たちは、この労働組合に参加し、同時に炭坑夫独自の労働組合を組織していった。

ウィアモウスは、内務省資料によりながら、「1818年8月頃に2人のメソジストの Wisman と Benjamin Newton は、ランカシャーの Kersel で坑夫を組織する任務を与えられ、そして最初の集會に700人以上を出席させた。内務省は、地方判事から『このニュートンなる人物は、ワイズマン同様一種のメソジスト説教者である』との情報をえた。2回目の集會が開かれ、ストライキが提案された」⁽⁷⁾ と指摘している。

メソジストらの意識的分子の指導もあって設立された炭坑夫の労働組合は、断片的だが資料的にその存在が証明される。内務省の資料である1818年9月1日付のある手紙は、「昨土日曜にマンチェスターの炭坑夫の集會」が開かれ「約120人の炭坑夫が出席し」、「彼らは賃金と計量について合意に達するまで仕事をしないと決議した」⁽⁸⁾ と記している。

また9月4日付のボルトンの炭坑主 Flelchen は、「多数の失業者たちが Baguley Pilkington のような指導者の下で一般組合・general union あるいは職業的団結・combination of trades を組織した。……如何なる賃金が支払われるべきかを命令する委員会・committee の危険性は、明らかである。労働者たちが組織した委員会が、あたかも合法的な活動をしているかのようにして、マンチェスターのあるパブハウスに置かれている」⁽⁹⁾ と記している。

以上のことから、ランカシャー地方で、マンチェスターに本部を置き、各地の炭坑代表からなる委員会をもつ炭坑夫の労働組合が組織されていたことは明らかである。

この炭坑夫の労働組合は、8月末か9月初め頃から、各地で賃上げ争議を展開した。断片的資料から窺えることは、8月19日以降、各地の炭坑代表者が集まって賃上げ要求を作成し、そのために争議を行なうことを決定

し、組合員は、この決定を自分の炭坑に持ち帰り、炭坑経営者に要求を提出し、満足な回答が与えられない場合は、ストライキを行なった、ということである。

セント・ヘレンズの炭坑主ヒューズは、争議の原因について次のように指摘している。炭坑夫の「不満は、3年前に起きた賃金引き下げに起因しており、それに対しては当時反対はなかった。彼らが今経営者に要求しているのは、元の賃率に戻すことである」⁽¹⁰⁾と。

ともかく、3年前に賃下げが行なわれたなかで、労働組合が組織されるや、賃上げを要求して闘争にたちあがったことは事実である。今争議の全貌は必ずしも明らかではないが、8月末から翌年の2月ごろまで、各地の炭坑でストライキが展開されていったことは明らかである。

8月27日付のオルダム炭坑主 chippindale の手紙は、「炭坑夫によるストライキは、疑いなく各地からあなたに伝えられている」⁽¹¹⁾ だろうと述べ、すでに8月末にストライキが起きていることを示している。

例えば、オルダムでは、炭坑主の Flelcher は、「彼の炭坑夫が、自分たちの要求を提出すると、それを団結とみなし、4人をランカスターに送った（投獄した、訳者註）」⁽¹²⁾ といわれ、9月1日のオルダムからの手紙は、「この地域のいくつかの炭坑は、操業していない」⁽¹³⁾ と書き、9月4日の手紙も「オルダムあたりの炭坑夫は、全体として仕事をしていない」と書いている。他方9月4日の手紙は、ボルトン近辺の殆ど炭坑夫は、「自分の仕事に戻ったか、戻りつつある」⁽¹⁴⁾ と記し、ボルトン周辺の炭坑ではすでにストライキが終息しはじめていたようである。

ところで争議の勝敗とはといえば、必ずしも明確ではないが、ボルトンに限ってみれば、幾分とも賃上げが行なわれたように思われる。9月22日の Flelcher の手紙は、「坑夫たちは、ほとんどの場合自分たちの賃金が上るものと判断して、みんな仕事に復帰した。ストライキをした自分の炭坑夫たちは、賃上げについてなんの約束もなしに仕事に戻った」⁽¹⁵⁾ と記している。

オルダムでも、9月6日付の手紙で一炭坑主は「炭坑主たちが炭坑夫との対立を調整したので、炭坑夫たちは、明日殆んど仕事に戻るだろう」⁽¹⁶⁾と書いているように、ストライキは、はやいうちに終息したようである。

しかしストックポートでは、10月10日頃までストライキが続いたようである。ストックポートから発せられた手紙は、「我々の近辺の炭坑夫は、7週間無秩序になっており、多くの炭坑夫たちが仕事を放棄していた」と記し、最後に「幸いにも問題は解決した」⁽¹⁷⁾と書いている。

炭坑夫の労働組合による賃上げ闘争は、各地で展開され、各地域それぞれ長短を示しながらも10月中旬頃までに一応終息をみたようである。因に、内務省資料は、その後の炭坑夫の争議を伝えるデータを全く示していない。かの「一般労働組合」もこの頃「破壊された」⁽¹⁸⁾といわれており、炭坑夫の労働組合もこの頃事実上解体されたと考えられる。

しかし、1919年に入って、セント・ヘレンズ地方で再び炭坑夫のストライキが展開された。同地の炭坑主であるヒューズは、1819年2月17日の手紙で「この地区の炭坑夫が騒動を起こしてから6、7週間になる」⁽¹⁹⁾と書いている。

この争議は、『リバプール・マーキュリー』紙の報ずるところによれば、「セント・ヘレンズとその周辺の炭坑夫は、賃上げを目的としてしばらく以前にいくつかの協会・Societyを組織した。情報によれば、この組織の目的は、次のようである。一つの炭坑の労働者が要求を行なう。そしてもし彼らが成功をおさめれば、その要求は他の炭坑の労働者によって連続的に提出される。もしその要求が拒否されれば、ストライキを行ない、就業している他の人々はそれを支援する」⁽²⁰⁾というものであった。

ここでも明らかに炭坑夫の労働組合が組織されて、賃上げ争議が展開されたことがわかる。しかも争議戦術の巧みさは、この労働組合の水準の高さをよく示しているといえよう。

この争議に対して炭坑経営者たちは、新聞によれば「組織に加入している人たちを直ちに解雇すると決議した」⁽²¹⁾。とはいっても、「数百人の炭坑

夫」が組合員だったので、彼ら全部を解雇できるはずはなく、それはただ組合員に対する脅迫にすぎなかった。その代り経営者たちは、「組織の書記として活動していた John Johnson, 別名 Cooke」を「不法な誓約を指導した罪で逮捕」⁽²²⁾した。

この指導者の逮捕に対して、「数百人」の組合員たちは、彼を救出すべく、彼の拘禁されていたパブハウスに押しかけた。官憲側の奇計によって Johnson は脱出させられたが、憤激した炭坑夫たちは、「夜になってたいまつを持って各炭坑に押しかけ、技師たちを追い払ったりした」。これに対して軍隊が出動し、経営者は、「最も活動的煽動者を逮捕」⁽²³⁾させて、騒動を鎮圧した。そして、スト続行派を孤立させるために、ストライキ中の炭坑夫を支援していた共済組合型の友愛協会に彼らへの支援を止めるように圧力を加えた。こうしてストライキは、3月初めに完全に終息し、恐らく労働組合も解体されたことであろう。

以上長々とランカシャー地方における炭坑夫の賃上げ争議を分析し、そこに炭坑夫の労働組合が一時的に形成されていたことをみてきたのであるが、ここでこの炭坑夫の労働組合が、どのような性格をもっていたか、そして本論のテーマに則っていえば、さきに存在していた友愛協会とどのような関係にあったか、について検討しておきたい。

まず最初に指摘しておきたいことは、この炭坑夫の労働組合は、すでにみたように一般労働組合の構成部分をなしながら、その支部あるいは職業組織として炭坑夫労働組合を組織していたということである。マンチェスター市内に本部が置かれ、各炭坑の代表者を集めて委員会を構成していたようである。こうしたパターンは、これまでみてきたスコットランド、イングランド北東部の労働組合と全く同じである。

このような労働組合は、どのように組織されたのであろうか。明らかに一般労働組合設立のリーダーたちによって意識的に組織されたいことは、これまで分析したことによって明らかであろう。スコットランドとイングランド北東部の場合は、明らかにブラザーリングを統合して労働組合

が形成されたのであるが、ランカシャーの場合は、今のところブラザーリングのような明確な組織は検出されておらず、事態は不明瞭である。

ただおよそいえることは、ランカシャー地方には、経営者主導の共済組合型の友愛協会ではなく、炭坑夫たちの主導になる自立性の強い共済組合型の友愛協会が一般的に存在していたのではないかと、いうことである。そして、別に炭坑夫のブラザーリング的な秘密の友愛協会が存在していなかったとすれば、そうした自立的な共済組合型の友愛協会が、この炭坑夫の労働組合の母胎となり、事実上支部的な存在となっていたのではないかと考えられる。

このような仮説を幾分とも裏付けるよう資料はある。すでに紹介したように1819年のセント・ヘレンズの争議に際して、炭坑経営者であった2人の治安判事は、ストライキを鎮静するために、町内に次のような文面の『プラカード』を建てた。少々長いがその主要部分を引用してみよう。

セント・ヘレンズ「近辺の平和的な炭坑夫たちは、共済目的の協会を組織しているが、Windle, Sutton, Parr の団結している炭坑夫によってずっと欺まかれてきた。これらの協会は、不当に扱われ、自分の過失なしに解雇された人々を助けるという考えによって、不満分子の炭坑夫たちの強い要望に従って寄附を与えるよう強いられている。サットン、ウインドル、ペアーの採炭夫・coal-getterの大多数は、自分から雇用を放棄し、そして今賃上げのために不法にもストライキを行ない、情容赦なく運搬夫や炭車夫のような数多くの無実の人々に困窮をもたらしている。それ故、協会がかの採炭夫を助けることは、その動機がいかに人間的であろうと、ただこれら寄食の人々の窮状を救うのみならず、組織に存在している抵抗精神をいたずらに延命させるだけであり、彼らの罪に加担することでさえある。協会の会員は、今やそのことをよく理解すべきである。それ故、この不法に対するこの告示以後に、もし寄附が行なわれたりすれば、協会は厳格なる法の正義に基づいて告訴されると覚悟すべきである。」⁽²⁴⁾

このプラカードの告示は、当時の友愛協会と炭坑夫について注目すべき

論点を示している。第1に、それは、当時、セント・ヘレンズ地方に、不熟練あるいは未熟練の坑夫（運搬夫や炭車押夫）などが加入する炭坑夫一般からなる共済組合型の友愛協会が組織されていたということである。第2に、この共済組合型の友愛協会は、ストライキに際して、失業手当（自己無過失の失業に対して手当を出す共済組合は結構存在していた）のようなものを支払って支援しており、経営者主導の共済組合ではなく、きわめて自主性の強い坑夫の友愛協会であることを示している。第3に、経営者たちは、採炭夫に非難を集中し、未熟練坑夫との分断を策しているが、これは、協会の指導権が熟練の採炭夫によって握られていたことを示している。スコットランドやイングランド北東部では、この熟練採炭夫がクラフト・ギルド的な同職組合たるブラザーリングを組織していたのであるが、ここでは、そうした明確な組織の存在が指摘されてはいない。その限りでは、私は、ブラザーリング的な傾向をもつ熟練炭坑夫の集団は形成されていたにしても、彼らはまだ明確にそうした組織を形成しなかったと考えている。

以上のことを念頭におくと、8月から組織されたランカシャー炭坑夫労働組合は、スコットランドとイングランド北東部の場合のように、クラフト・ギルド的な同職組合たるブラザーリングが基盤となり組織されたのではなく、19世紀10年代の社会潮流にあって、メソジストや改革者、意識的な労働組合設立運動者たちの呼び掛けに、共済組合型友愛協会に結集していた熟練坑夫集団が呼応して組織され、更に共済組合型友愛協会を足場として利用しつつ活動したのではないかと考えられる。

従って、ランカシャーにおいては、自立的な共済組合型の友愛協会が労働組合に直接転化したというのには、無理があるといわなければならないが、前者を基盤として労働組合が形成されたといっても大きな間違いではないだろう。

《注》

- (1) A. Aspinall, *The Early English Trade Unions*, pp. 272-3.

- (2) Ibid., pp. 273-4.
- (3) 従って当時の資料は、この組合をしばしば General Union of Trades と呼んだり、General Union と呼んだりしている。op. cit., p. 304, p. 287.
- (4) Ibid., p. 304.
- (5) J. L. and B. Hammond, *The Skilled Labourer*, p. 103.
- (6) Ibid., p. 103.
- (7) Robert Weamouth, *Some Working-class movements of the Nineteen century*, 1948, p. 300.
- (8) A. Aspinall, op. cit., p. 281.
- (9) Ibid., p. 288.
- (10) Ibid., p. 315.
- (11) Ibid., p. 279.
- (12) Ibid., p. 282.
- (13) Ibid., p. 281.
- (14) Ibid., p. 286.
- (15) Ibid., p. 302.
- (16) Ibid., p. 291.
- (17) Ibid., pp. 303-4.
- (18) Ibid., p. 304.
- (19) Ibid., p. 315.
- (20) *Liverpool Mercury* 19. Feb., 1819. 又は J. R. Harris, *The Hughes Papers: Lancashire social life, 1780-1825. Transactions of the Historic Society of Lancashire and Cheshire*, Vol. 103, p. 123.
- (21) Ibid., p. 123.
- (22) Ibid., p. 123.
- (23) Ibid., p. 123.
- (24) *Liverpool Mercury*, 26. Feb., 1819. J. R. Harris, op. cit., pp. 123-4.

3. ヨークシャーにおける炭坑夫友愛協会の実態

(1) ヨークシャーにおける炭坑夫友愛協会の普及

ヨークシャーの石炭業は、ランカシャーの石炭業よりやや早くから起こっていたとはいえ、目立った発達は18世紀後半からであった。そして18世紀の前半には、スコットランドやイングランド北東部のように、炭坑夫の

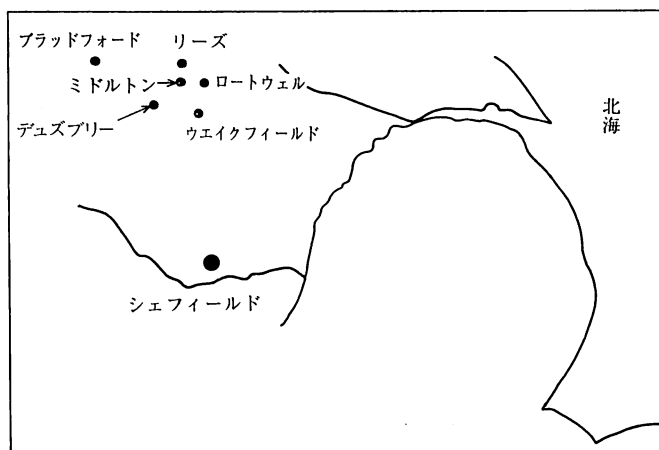
統一的な集团的年季契約も行なわれていたが、その後は、年季契約そのものは行なわれていたが、各人が自由に契約を行ない、時には1年以内の契約も行なっていたよう⁽¹⁾である。従って、ヨークシャー石炭業においても、今のところランカシャーと同様に、明確にブラザーリングのようなクラフト・ギルド的な同職組合の存在を確認することができない。とはいえ、ここでも炭坑夫の共済組合型の友愛協会の存在が確認され、それが多分に自立的な傾向をもって存在していたように思われる。

ヨークシャーの石炭業は、西と南に分かれており、西ヨークシャーの石炭業は、早くから発展をみせ、そこには18世紀末から、友愛協会が散在していたことが確認される。

例えば西ヨークシャーの石炭業史の研究家 J. Goodchild によれば、「ウエイクフィールド、リーズ近くのみドルトン、ソーンヒル、ハリファックス周辺などで、18世紀末から19世紀初めに設立された多くの炭坑夫友愛協会が存在した」⁽²⁾ということである。そして彼は、「1819年に炭坑夫組合・Coal Miners Union として知られているミドルトン協会は、1782年頃から存在していた」⁽³⁾と述べている。この炭坑において1786年12月に坑夫の賃上げストライキが起きたが、アシュトン、サイケスも、そこに『結社・confederacy』の存在⁽⁴⁾をみている。グッドチャイルドは、更に1819年のミドルトンの炭坑夫の協会は、「純粋に葬儀協会であった」⁽⁵⁾と述べ、それが共済組合型の友愛協会であったことを示している。

更にグッドチャイルドによれば、1797年に西ヨークシャーの炭坑主である Fenton 家の Stanley 炭坑で起きた争議の資料は、争議の背後に「結社・confederacy」の存在を明確に指摘している。フエントン家の弁護士の告訴状は、「坑夫たちは、単独あるいは結社によって突然勤務を放棄したり、契約書にあるように目的を明示せず、雇用と勤務の契約を破ることを当然と考えている」と指摘し、労資間の紛争が「非常にしばしば起きた」⁽⁶⁾と記している。

以上のように、西ヨークシャーの炭坑では、しばしば争議が起き、その



第3図 ヨークシャー地方の炭坑町

背景に炭坑夫の組織の存在が指摘されているのであるが、それがいかなる性格の組織であったか、今のところ十分に明らかではない。これらの争議そのものは、18世紀末のこの地方の炭坑夫が、自立的傾向を強めていたことを示しているが、その背景にあった組織とは、恐らく共済組合型の友愛協会だったのではなかろうか。

この点は、19世紀の初めになると幾分とも明確になる。現在ウェイクフィールドの炭坑夫友愛協会の1811年の規約が残っており、それは、この頃、自立的な傾向をもった共済組合型の炭坑夫友愛協会が存在していたことを示している。今ここでこの友愛協会について、少々立入って分析しておこう。この友愛協会の規約は「ウェイクフィールドの町と教区およびその周辺の町と地域の炭坑夫友愛組合・The Friendly Associated Coal Miners の間で守られるべき規約、規則、秩序、規律」⁽⁷⁾ という長い表題をもっている。

この友愛協会は、規約からみる限り⁽⁸⁾、明らかに炭坑夫の共済組合のようである。入会金は1シリング、会費は週3ペンスであり、費用が足りない場合は、6ペンスに増額されることになっていた。そして誰れも、会費

納入額が10シリング6ペンスになるまで、基金から扶助を得ることができない。会員が病気になり怪我した場合に週6シリングが支払われた。そしてもし自分の過失ではない限り、失業した場合にも、上記の救済が認められていた。

組織は、規約の表題にあるように、これまでの友愛協会のように、1炭坑内に組織されたものでなく、ウエイクフィールドの周辺の諸炭坑を統合する共済組合であり、イングランド北東部で1812年に試みられた地域を統合する統一的な協会⁹⁾であることがわかる。規約は、各炭坑から1人の代表が選出され、会費を徴収することになっていた。協会は、ウエイクフィールド町内の Three Tuns Inn におかれ、そこに Box が保管された。

このほかこの規約は、集会のたび役員には1人3ペンスの酒代を支払い、イースターの火曜日には宴会を催し、会員は、ディナーとビール代として8ペンスを支払うべきものと規定されている。こうした規定は、他の一般の友愛協会にも見られることであるが、次の規定は注目される。いかなる会員も集会において、悪態や嘘をついたり、政治や宗教について論議したり、王、国家、国の法律、国会や役人、治安判事について不尊な話し方をしたり、協会の良き秩序を乱したりすれば、除名され、あらゆる扶助を失なう、という条項である。この規定は、この協会が、労働組合でないことを、むしろ事さら強調しているように思われる。この協会が団結禁止法下の1811年に合法的に存在していた以上、共済活動を目的とした友愛協会であったことは疑いない。

問題は、この友愛協会の性格であるが、今のところ全くもってそれは不明である。ただ全体として感じられることは、経営者からの寄附の規定などなく、一応炭坑夫の自主的な協会であったようであるということ¹⁰⁾である。

いずれにしろ1811年頃に、ウエイクフィールド周辺に、1炭坑を超えて組織された共済組合型の友愛協会が存在していたことは事実であり、賃上げ争議にみられるように炭坑夫が自立性を強めていたなかでの、そうした

友愛協会が、炭坑夫としての自覚を強めたり、労働組合的活動への関心を促進する一つのテコとなったであろうことは想像に難くない。

他方、南ヨークシャーでは、炭坑夫の友愛協会の存在は、ほとんど全く明らかではない。この地方の石炭業は、西ヨークシャーより遅れて発達したこともあり、労資関係の成熟も遅れていたことが考えられるが、18世紀末、シェフィールドなどでは、金属工職人や機械工の友愛協会が活発に活動して⁽¹¹⁾おり、炭坑にも友愛協会が存在していた可能性は強い。

例えば、シェフィールドの Fitzwillam 家の炭坑では、1795年に炭坑夫の死に際して未亡人には、週当りの手当が2シリング6ペンス支払われていた⁽¹²⁾といわれている。ここには共済組合型の友愛協会が存在していたように思われる。

あるいは、1825年にシェフィールドで組織された炭坑夫の労働組合の規約の前文は、「シェフィールドとその周辺の熟練炭坑夫・operative Coal Miners は、職業の利益を維持するために自分たちの中に親密な組合・Union が絶対に必要であると長い間自覚してきた」、そして「『シェフィールドとその周辺の炭坑夫組合・Coal Miners Union』と呼ぶ一つの協会、組織に自分たちを統一することを決定した」⁽¹³⁾と指摘している。

この指摘は、後に詳しく分析するように、分散的に存在していた共済組合型の友愛協会を統一して・to unite, 組合・Union にしたと読めるのである。何故なら、1825年に組織された労働組合は、どうも協会を統一した組合だったらしいからである。

以上のように、1824年の団結禁止法廃止以前に、南ヨークシャーにも自立的な共済組合型の友愛協会が存在していたことが窺える。

《注》

(1) John Goodchild, *The Coal Kings of Yorkshire*, p. 64.

(2) *Ibid.*, p. 72. もっとも残念ながらグッドチャイルドは、この友愛協会の詳しい資料を示しているわけではなく、当時の資料が炭坑夫友愛協会の存在を指摘していたことを示しているだけである。私自身は、時間的余裕がなくそれを追跡調査して、詳しい資料を発見するには至らなかった。若い研究者の

今後の研究に期待したい。

- (3) T. Ashton and J. Sykes, *The Coal Industry of Eighteenth century*, p. 132.
- (4) J. Goodchild, *op. cit.*, p. 72.
- (5) *Ibid.*, p. 72.
 しかしグッドチャイルドは、根拠を示してはいないがこの協会が「労働組合活動の便利な媒体であった」p. 72. と指摘しており、それは後にみるように、1819年に設立された労働組合が、こうした共済組合を基礎にして結成されたことを示唆している。
- (6) *Ibid.*, p. 66.
- (7) F. Machin, *The Yorkshire Miners*, Vol. I, 1958, p. 30. マーチンは、この著書でこの規約を簡単に紹介し、分析しているが、残念ながら全文を示していない。この規約全文があれば、この協会の性格はかなり明らかになったであろう。私はこの規約を永い間探がしもとめてきたが、イギリス滞在末期(1988年3月)に、パーンズリーにある全国坑夫組合(NUM)のヨークシャー地方本部にそれが残されている事を知った。しかしNUMの委員長アーサー・スカーギルの出身地であるこの地方本部は、私の規約閲覧希望に対して部外者には見せられないと答えるのだった。従って残念ながら、私は、この規約をいまだにみる事ができず、もっぱら極めて不十分なマーチンの分析材料に依拠せざるをえなかった。
- (8) 以下の分析は、マーチンが要約的に紹介している規約の要点による。*op. cit.*, p. 30.
- (9) 拙稿「イングランド北部における炭坑夫の初期友愛協会」、『経済志林』56の4、1989年2月、78頁参照。また一般に共済組合としての友愛協会は、マンチェスターにおいて、1814年頃から、単位協会を統合して支部となし、一般委員会を設立し、1816年には支部連合 Affiliated Order を組織しはじめていた。P. Gosden, *The Friendly Societies in England*, 1960, pp. 26-9. 従って炭坑夫の友愛協会の統一化も、一つのこの頃の趨勢を現わしていたと考えられる。
- (10) マーチンは、この協会が労働組合であったのではないかと考えているが、F. Machin, *op. cit.*, p. 30. 根拠は示されていない。
- (11) 当時の友愛協会を調査したイーデンは、18世紀末のシェフィールドには「基金事情について情報を与えるのに非常に注意深い」未登録の友愛協会が多数存在していたと指摘しており、シェフィールドでは具体的に資料が得られなかったようである。F. Eden, *The State of the Poor*, Vol. III, p. 873.
- (12) Graham Mee, *Employer: Employee Relationships in the Industry*

Revolution, S. Pollard, C. Holmes, ed., *Essays in the Economic and Social History of South Yorkshire*, 1976. p. 50.

- (13) Report from the Select Committee on Combination Laws, 1824, Vol. II, Appendix, No. 15. p. 51.

(2) 西ヨークシャーにおける友愛協会を基盤とする炭坑夫労働組合の形成

1819年11月頃から約3ヶ月間、西ヨークシャーの諸炭坑で、賃上げのためのストライキが展開されたが、それは炭坑夫の労働組合によって行なわれたものであった。われわれは、この争議の経過を追いながら、そこに存在した炭坑夫労働組合の性格を分析し、炭坑夫友愛協会との関係を明らかにしたい。

1819年11月20日の『リーズ・マーキュリー』紙によると、夏にリーズ、ブラッドフォードの周辺の炭坑夫たちが「ある条件のもとで自分たちの組織の誰れかが仕事をやめた時それを支援するために週に一定の額を支払うことを決めた」⁽¹⁾。この指摘は⁽²⁾、後の事情から察して、この夏にこの地方の炭坑夫たちが、各炭坑の坑夫たちを統一して労働組合を組織したことを示している。

さきの新聞は、11月初めに「目的のために彼らは基金が十分であると判断して」⁽³⁾、炭坑たちは、賃上げを経営者たちに要求した、と指摘している。炭坑夫たちは、当初400人ほどがストライキに入り、石炭価格の引き上げを要求し、もし炭価が引き上げられ、賃上げがなされなかったら「直ちにあなた方の炭坑から引き揚げるだろう」との手紙を出した。これに対して経営者たちは会合をもち「炭坑夫たちの組合・Unionを破壊するために炭坑夫たちを解雇すること」⁽⁴⁾を決議した。ここで炭坑主と経営者たちは、統一行動をとるために一定の組織をつくったようで、経営者側の資料には組織の「書記」⁽⁵⁾の署名がみられる。

ストライキを行なった炭坑夫たちは、解雇状をつきつけられ、そして従

来の労働条件をくつがえす契約条項に署名するよう迫られた。新聞は、「炭坑夫たちは一斉に署名を拒否し、解雇された」⁽⁶⁾と伝えている。これに抗議し、新たな対応を検討するために、炭坑夫たちは、11月25日に、リーズから12～3 km離れたDewsburyという町で、「2,500～3,000名の炭坑夫」を集め「大集会」を開き、「いくつもの異なったバンドを先頭に町をパレードし」、「全く静かに散会した」⁽⁷⁾。

この集会では『大衆への呼びかけ』というビラが撒かれた。それには、切羽の炭坑夫に対して1日5シリング（現行は3シリング）、12～18歳の少年に対しては1シリング～2シリング6ペンスの賃金支払いの要求がかかけられていた⁽⁸⁾。

経営者側の強行策は、炭坑夫を憤激させ、ストライキを拡大させたようであるが、詳しい事情は明らかではない。ただ1819年12月に入ってから新聞は、経営者たちが、労働組合の破壊に全力をあげている様子を伝えており、争議が続行されていたことを示唆⁽⁹⁾している。

他方労働組合側は、経営者に会って話し合うために代表を送り、「有効な妥協と和解の方策を見出すために大きな力を発揮した」⁽¹⁰⁾と新聞は報じている。しかし経営者側は、組合代表との会見を拒否し、「組合・Union Societyを破壊するという以前の決議を再確認し」⁽¹¹⁾、組合破壊のため種々の方策を展開した。経営者たちは「ライディング（西ヨークシャー地方のこと、引用者）におけるすべての監獄は、組合員・Union menの3分の1も収容できないだろう」⁽¹²⁾と考え、炭坑夫たちを逮捕するより、まず労働組合を破壊することに努力を集中した。そのために「労働者が組合を放棄することに同意しない限り、炭坑を閉鎖」し、他の産業からストライキ破りを連れて来て、炭坑夫たちに「現在の団結や組合の会員である者は応募する必要がない」⁽¹³⁾と申し渡し、スト強行派、組合擁護派の坑夫を孤立化することに努めた。そして労働組合の指導者や強力な活動家を「炭坑夫に不法な団結に加わるよう煽動した罪で、また労働組合に入らずに仕事をしていた他の者を脅迫的言辞で脅した罪」⁽¹⁴⁾で、告訴し投獄した。

こうして1819年11月初めから始まった争議は、翌年の1月初めまで続いたが、多くの炭坑夫は、労働組合をあきらめて復職し、「経営者に従わないと最後まで決意してストライキを続けていた」⁽¹⁵⁾ 少数の炭坑夫たちは、ヨークシャーから追放され、ヨークシャーの初めての炭坑夫労働組合は、数ヶ月で姿を消した。

以上のように、われわれは、西ヨークシャーにおいて、1819年8月頃から翌年1月頃まで、炭坑夫の労働組合が存在していたことを確認することができる。当時の新聞は、争議を行なった組織を「Union・組合」と呼んだり、「Union Society・組合協会」と呼んだ。当時 Trades Union・労働組合という呼び方はまだ一般的ではなかったが、ここで Union とか Union Society と呼ばれていた組織は、明らかに、ストライキ基金を積立て賃上げを目的として組織されていたことは、明らかであり、短時間しか存在できなかったとはいえ、はっきり労働組合だったと言い切ることができる。

しかし残念ながら、この西ヨークシャーの炭坑夫労働組合の規約はまだ発見されておらず、どのような性格をもった組合であったのか明確ではない。とはいえ争議の過程で浮き彫りされたこの労働組合は、組織的には、1炭坑を超えて、西ヨークシャー地域の多くの炭坑の坑夫を組織していたことは明らかである。11月25日にデュズブリーで開かれた大集会には、内務省資料によれば2,500～3,000人が集ったと指摘されており、きわめて大衆的な性格をもっていたことわがかる。そしてこの組合は、他の地域の労働組合がそうであったように「Union Committee」⁽¹⁶⁾ を組織しており、それは恐らく炭坑代表者の委員会だったであろう。またこの組合は、集会でビラを撒いたり、経営者に対して公然と「要求書・Printed Statement」⁽¹⁷⁾ を提出したり、きわめて組織的動きをしていることが注目される。

賃金要求、ストライキ、そして炭坑夫への経営者の弾圧は、炭坑ごとに行なわれ、そこには組合の支部のような下部組織が存在していた。例えば、ブラッドフォードの Bowling and Low Moor Company の炭坑夫

は、独自の要求書・statement を発行して、「自分たちの賃金は、1日2 シリング4ペンスから2シリング8ペンスの間にあり、その僅かの手当の中から道具も買わなければならない」⁽¹⁸⁾と述べている。ここでは、炭坑内の労働組合が、独自に支部として活動していることが窺える。

ただこの労働組合は、スコットランドやイングランド北東部の労働組合のように、熟練坑夫を中心にしたものかどうか、明らかではない。この組合は、運搬夫などの未熟練坑夫の賃上げ要求をも提出しているが、恐らく他の組合のように熟練炭坑夫（18歳以上の採炭夫中心）の労働組合ではなかったかと思われる。また石炭価格の引き上げによる賃金要求なども、スコットランドやイングランド北東部の熟練炭坑夫の同職組合的傾向のものと似ている。

さてこの西ヨークシャーの最初の炭坑夫労働組合は、どのようにして組織されたのだろうか。この点を示す資料は全くない。1818年夏にランカシャーで炭坑夫労働組合が設立され、翌年初めに消滅したが、そこで活躍した指導者、活動家が追放された。彼らは、西ヨークシャーに移って、そこで労働組合設立に加わった可能性がある。例えば、1818年にできた西ヨークシャーの労働組合は Union Society と呼ばれたが、管見する限り、ランカシャーの友愛協会にこの名称が多く、ヨークシャーの友愛協会にはみられない。ウエイクフィールドの炭坑夫友愛協会も Friendly Associated Coal Miners と称していた。また1825年に設立されたブラッドフォードの炭坑夫労働組合も Coal Miners Union と自称した。従って1819年の西ヨークシャーの労働組合が、Union Society という名称をもったことは、ランカシャーの影響が感じられる。

その点はともかく、西ヨークシャーのこの労働組合も、きわめて大衆的で各地の炭坑を統合した形跡があり、確証はないが、共済組合型の友愛協会を統合して組織されたか、少なくともそれらを基盤として組織されていたことが窺える。ただしブラザリングのようなクラフト・ギルド的な同職組合を統合して組織されたスコットランドとイングランド北東部の初期

労働組合と違って、西ヨークシャーの初期労働組合は、新聞にみられる限り組織的にはあまり強力ではなかったように思われる。

《注》

- (1) *Leeds Mercury*, 20. Nov., 1819. or, F. Machin, *The Yorkshire Miners*, p. 31.
- (2) すでにランカシャーの友愛協会の分析でみたように、共済組合型の友愛協会はストライキ中の炭坑夫に失業手当を支給したのだが、前項でみた1811年のウエイクフィールドの友愛協会も、無過失の炭坑夫の雇用喪失には手当を出しており、労働組合の形成、あるいは共済組合型の友愛協会の労働組合化は、その規定を拡大解釈して、ストを無過失の失業とみなし手当を出そうとしたのであろう。
- (3) *Leeds Mercury*, 20, Nov., 1819.
ただしここでの指摘は、明らかに炭坑夫がストライキ資金を積立てたことを意味しているであろう。
- (4) *Ibid.*
- (5) F. Machin, *op. cit.*, p. 33.
- (6) *Leeds Mercury*, 4, Dec., 1819.
- (7) A. Aspinall, *The Early Trade Union*, pp. 340-1.
- (8) *Ibid.*, pp. 340-1.
- (9) *Sheffield Iris*, 7, Dec., 1819. F. Machin, *op. cit.*, pp. 32-3.
- (10) *Leeds Mercury*, 4, Dec., 1819.
- (11) *Ibid.*
- (12) *Sheffield Iris*, 7, Dec., 1819.
- (13) *Leeds Intelligencer*, 6, Dec., 1819.
- (14) *Ibid.*
- (15) *Ibid.*
- (16) *Leeds Intelligencer*, 6, Dec., 1819.
- (17) *Leeds Mercury*, 4, Dec., 1819.
- (18) *Ibid.*

(3) 南ヨークシャーにおける友愛協会を基盤とする炭坑夫労働組合の形成

西ヨークシャーに対して南ヨークシャーの石炭業は、交通の不便もあってかなり遅れて発達することになった。18世紀末から19世紀初めのこの地

方の石炭業は、みるべきもの⁽¹⁾がなかった。従って、炭坑夫の友愛協会に関してもあまり問題が起きていない。しかしながら団結禁止法が廃止された翌年1825年にシェフィールドにおいて炭坑夫の労働組合が設立されている。

しかしこの労働組合については、規約が残されているだけで、どのような具体的な活動を行なったかは全く明らかなではない。ここでは、われわれのテーマに則って、この規約を分析し、この労働組合の性格がどのようなものであるかを明らかにしておきたい。

この規約は、「シェフィールドにある炭坑夫組合・Coal Miners Union と呼ばれる協会・Society の会員によって守られ保持されるべき規約と規則」⁽²⁾と題されている。この規約には日付がないが、1825年の団結法に関する政府報告書に収録されており、1824年か25年のものであろう。明らかにこの組織は労働組合として組織され、規約もシェフィールド市内の Westbar and Merket Place で「C. & W. Thompson によって印刷された」⁽³⁾と公然と記しているので、労働組合が合法化されてから組織されたものと思われる。

まず規約を全文紹介しておこう。規約には次の如き前文が付いている。

「序文 シェフィールドとその周辺の熟練炭坑夫・operative Coal Miners は、職業の利益・Benefit を維持するために自分たちの中に親密な組合・Union が絶対に必要であると永い間自覚してきたが、以下のような罰金、罰則による処分の下に一定の規約、規則によって営まれる『シェフィールドとその周辺の炭坑夫組合・Coal Miners Union』と呼ぶ一つの協会 Society あるいは組織・body に、自からを統一することに決定した。」

そして本文は次の通りである。

シェフィールド及び周辺の炭坑夫組合の規約

(1) この協会は、炭坑夫組合・Coal Miners of Union と呼ばれる。

そして運営委員会と呼ばれる委員会が組織されるべきである。委員会は、大炭坑からはそれぞれ1人、多数の小炭坑からは1人によって構成される。この委員会は業種全体の問題に対して取り組むべきである。任務を拒否すると1シリングの罰金。

- (2) 運営委員会は、毎月第2土曜日の夜7時から9時の間開催される。その会合では、適時、組合員の寄附を集める目的とか、必要と思われる他の活動についての処置などが合意されるべきである。
- (3) 各炭坑は、組合の活動の処理のために最も適当と思われ、かつ必ず出席するような者だけを2人派遣すべきである。
- (4) この組織のために、四つの錠前のついた箱が用意されなければならない。三つのカギは、委員会が任命する人によって保持され、残りのカギはハウスの家主によって保持されるべきである。
- (5) 運営委員会を構成するために任命された人の2分の1が、4ヶ月間任務につき、残りの2分の1は前述の方法で派遣される他の人と2ヶ月間の終りに交替し同じようにして、各2ヶ月ごとに定期的に交替が行なわれるべきである。
- (6) 運営委員会は、組合問題を処理するために必要である種々の役員を指名すべきである。任命された人は、任務を拒否すると1シリングの罰金が課せられる。またカギ保持者は、指定された時と場所に出席を怠ると6ペンスの罰金が課せられる。
- (7) 週ごとの会費や仕事の標準価格表の変更のような重要問題については、運営委員会は、運営委員会が提案することやまた運営委員会が示す修正の目的を承認してもらったり、支持を受けたりするために、組織の全員を集めるべきである。そのような集会に出席を怠ると3ペンスの罰金。
- (8) この組合の会員は、基金を積み立てる目的と労働の公平な価格を達成したり維持したりする目的に利用するために、週3ペンスの会費を支払うべきである。この3ペンスは、週ごとに各炭坑で集められ、毎

月シェフィールドにある運営委員会に支払われなければならない。各人はそれを怠ると月3ペンスの罰金である。

- (9) 近年炭坑は、無資格者の炭坑流入によって大いに苦しんでいるので、今後、16歳から採炭夫の職業に従事していなかった者は、働くことが認められないと決定する。
- (10) 1人の書記が指名されるべきである。その書記は、この協会の書類を保管し、あらゆる金銭の支払、および月毎のあるいはその他の集会で処理されたあらゆる事項について記述を残さなければならない。
- (11) この協会の会計は、会計問題のために開かれる年4回の集会で、全員に報告されなければならない。そして全ての滞納金は、この時までを支払われるべきである。これを怠ると1シリングの罰金である。
- (12) たとえいかなる者も、正しいやり方で自分の仕事をせず、あるいは労働者にあるまじき行為によって職を失なったとしても、この組合によってしかるべく扱われることはないし、またいかなる扶助も受けることはできない。
- (13) もし会員が、自分の会費の支払いと、この組合の規約の遵守を拒否するならば、運営委員会は、委員会の月例集会で、必要と考えられる手段をこうじるべきである。
- (14) 運営委員会は、必要と考えるならば、この規約の変更、付加を行なうべきであるが、しかしそのような変更等は、それがこの組合の会員を拘束する前に、全体あるいはその目的のために指名された代表者たちによって承認されなければならない。

以上のように、このシェフィールドの炭坑夫組合の規約は、当時の労働組合の性格をよく表わしていて興味深い。次にこの労働組合の特徴を分析してみよう。

第1に、この組合の目的をみてみよう。序文は、組合の目的を「職業の利益を維持する」とことごとく一般的に規定しているが、第8条は、「目的」として「基金を積み立てる」とことと「労働の公平な価格を達成したり維持

したりすること」とはっきり規定している。第7条は「仕事の標準価格表の変更」を重要な問題としてうたっている。これらの規定は、明らかに、この組合が、炭坑夫の利益とくに賃金の改善・維持を主要な目的としていえることがわかる。従ってわれわれは、この組合が、労働組合であったと解することができる。

賃金問題のほかに、「基金を積み立てる」こと、つまり相互扶助のための基金積立を規定している。しかし不思議なことに第12条では、公正に働かず、不当な行為で「職を失なったとしても」「いかなる扶助も得られない」と述べているが、こまかな扶助規定がなにもない。これは、この組合が、一切共済活動をしなかったというのではなく、明らかに共済積立を主張しているので、共済の細目規定が別途に存在していたと思われる。この点はこの組合の組織構成の問題にからむので後に再論することにする。

第2に、この組合の組織についてみよう。まずこの組合員の資格をみると、序文では、この組合が「熟練炭坑夫・operative Coal Miners」の「職業の利益を維持する」ために組織された旨指摘されていることから、クラフト・ユニオンの熟練職種の労働組合であることがわかる。そして更に第9条では、「近年炭坑は、無資格者の炭坑流入」に悩んでおり、「今後、16歳から採炭夫・coal-getter の職業に従事していなかった者」を、炭坑で働くことを認めないと規定している。この規定は、この組合が熟練炭坑夫中心の組合であったことを示唆しているが、具体的に未熟練炭夫が組合員に入れたかどうかは不明である⁽⁴⁾。

次に組合の組織構成をみてみよう。この組合は、他の労働組合のようにある単一の炭坑の労働組合ではなく「シェフィールドとその周辺」の炭坑の炭坑夫を統一する横断的な労働組合である。第1条は、はっきりと「大炭坑からはそれぞれ1人」「多数の小炭坑からは1人」の代表が選ばれ、委員会・committee を組織するよう規定している。それは、大炭坑の組合が、事実上この組合の支部を構成することを意味している。そしてさきほどみたように、この組合には、具体的に共済規定がなかったのは、恐ら

く各炭坑に具体的な共済規定が存在していたからだと考えられる。それは、恐らく共済組合型の友愛協会のものであったのではなかろうか。

次に組織運営についてみると、会費は、週3ペンス、月12ペンスであった。各炭坑の代表によって構成される運営委員会は、第2条にあるように毎月第2土曜日に開催され、役員を選出し（第6条）、組合活動を統括した（第2条）。また「会費や仕事の標準価格表の変更のような重要問題については」、「組織の全員」集会を開いて検討すべきであると規定されている（第7条）。

以上のように、この炭坑夫組合は、スコットランドの1816年の労働組合などと較べると大変素朴で、規約も不明瞭な部分も少なくない。またシェフィールドの炭坑夫労働組合は友愛協会の歴史も浅く、組合自体の活動も明確に残されていないところから、それほど活発に活動しなかったようにも思われる。

しかし、シェフィールドのように炭坑の歴史も炭坑夫の友愛協会の歴史も浅い地方で、大争議なしに労働組合を組織し、活動するということ自体が、一般的に炭坑夫の組織性、自覚の高さを十二分に示すものであると言えよう。そして規約の序文にあるように炭坑夫たちが「職業の利益を維持するために自分たちの中に親密な組合が絶対に必要であると永い間自覚してきた」といい、「一つの協会あるいは組織に、自からを統一することに決定した」という時、労働組合が一つ突然組織されたというのではなく、19世紀はじめに存在していた共済組合型の友愛協会を基盤にし、そこで自覚的に活動する意識的な坑夫らが語り合いながら、あるいはバプティストや改革主義者の影響や指導を受けながら労働組合を形成したと考えられるのである。この組合の規約自体も、共済組合型の友愛協会の跡を多く残しているのである。

また最後に指摘しておけば、さきにみた西ヨークシャーの炭坑夫労働組合は恐らくスコットランドやイングランド北東部の炭坑夫労働組合のように強力なものではなく、このシェフィールドの炭坑夫労働組合のようなも

のだったのではないと思われる。

《注》

- (1) S. Pollard and C. Holmes, ed., *Economic and Social History of South Yorkshire*. をみよ。
- (2) *Report from the Select Committee on Combination Laws, 1824, Vol. II, Appendix, No. 15, p. 51.*
- (3) *Ibid.*
- (4) このことは、スコットランドとイングランド北東部と較べてみると、この組合以前の南ヨークシャーの炭坑夫が未熟練労働に対する厳しい規制を欠いていたことを示しており、この組合は、ブラザーリングのようなクラフト・ギルド的同職組合の伝統を著しく欠いていた印象を与えている。